嬉し恥ずかしシュークリーム

旭川市立緑が丘中学校　西野目実亜　２年

外の皮は香ばしく、中のクリームは濃厚で絶妙な甘さ。互いに調和し、引き立てあっている。そして、キャベツのようなかわいらしいフォルム。そう、シュークリームだ。私が一番好きなスイーツだ。

今までいろいろなお店のシュークリームを食べてきた。クッキー生地のもの。中のカスタードがこぼれそうなほど柔らかいもの。注文してからクリームを入れてくれるもの。様々なものがあり、どれもおいしい。特に私が気に入っているのは家に帰るときによく通りかかるお店のものだ。

そのお店のものはシュー生地もクリームもしっかりしていて、かじってもつぶれずにカスタードとホイップの層が綺麗に現れる。クリームがたっぷりと入っているが、あっさりしていてしつこくなく、いくらでも食べられるような気がする。普通サイズからとても大きなものなど様々な種類のシュークリームを売っていて、一番大きなものは直径約十五センチメートルもある。食いしん坊な私は勿論いつも一番大きいサイズのものを食べる。

以前、父がそれぞれサイズの違う三つのシュークリームを買ってきてくれたことがある。母は私にどれがいいか尋ねた。普段なら迷わず一番大きいものを選ぶのだが、ちょうど叱られた後だったので申し訳なさを感じていて、「一番大きいのは、ママが食べていいよ」と答えた。きっと母は「いいよ。実亜が食べなよ」と譲ってくれるだろうと予想していたのだが、意外にも「イエーイ」と言って満面の笑みを浮かべて、自分の皿にのせてしまった。本当は私は物凄くその一番大きなシュークリームを食べたかったのだ。気がつけば目から大粒の涙が溢れ出し、抑えていたのだが「一番大きいのが食べたかった」と本音がもれてしまった。母は笑ってそれを私にくれた。後から聞いた話なのだが、母は私に少し意地悪をしたかっただけらしく、どちらにせよ私に譲るつもりだったそうだ。

それからシュークリームを食べるときには毎回この話が出る。家族全員大好きなエピソードだ。楽しそうに話す父や母を見ていると私も嬉しいようなくすぐったいような気分になり、家族に愛されていることを実感する。この大きなシュークリームは私たち家族を笑顔にさせる特別なスイーツだ。このシュークリームと家族がいればたいていの事は乗り越えていける気がする。そんな力を私にくれるこのシュークリームをずっと推し続けたい。